

派遣者番号	管R6K03	氏名	宇田 圭佑
研究主題 —副主題—	初めての異動で通常の学級から特別支援教室を担当する教員の困難について —半構造化インタビューを通じた困難の質的データ分析—		
派遣先大学	玉川大学 教職大学院	指導担当者	小泉 晋一
所属	教育庁指導部指導企画課	所属長	藤田 修史

キーワード：初めての異動 特別支援教室 教員の困難

要旨： 異動の内示から2年を中心に困難の出現時期に注目し、初めての異動で通常の学級から特別支援教室の担当になる小学校の教員の困難について包括的、探索的に知見を得ることを目的に半構造化インタビューを行った。インタビュー内容を逐語化し、質的データ分析法を用いて、カテゴリーを生成した。大カテゴリー【通常学級を基準と考えることによる困難】【専門性の低さによる困難】が初めての異動で通常の学級の担任から特別支援教室の担当となることで生じた特徴的な困難と考えられる。

時期の面からは、特定の時期に語られた困難と継続して語られた困難が存在した。また、時期により困難の種類に多寡があった。異動後の1学期には特に様々な種類の困難が生じていること、内示の時期から困難が生じていることが示唆される。

1 目的

小学校教員の精神的健康状態について、令和6(2024)年12月の文部科学省(2024b)の「令和5年度 公立学校教職員の人事行政状況調査」によると、小学校の教職員の精神疾患による病気休職者が平成30(2018)年度に比べ令和5(2023)年度では、人数、全体に占める割合ともに増加している。教員の精神疾患による休職者の45.4%は休職発令時点における所属校勤務年数が2年未満で休職に至っており、文部科学省(2013)の「教職員のメンタルヘルス対策について(最終まとめ)」と同様に異動後の2年間で休職に至る傾向が現在も続いている。小学校の教員の精神的健康度の問題は、異動による負担もその一因であることがうかがわれる。

特別支援教室を利用する児童の増加とともに通級を担当する教員数は、増加している。文部科学省(2024a)の「特別支援教育資料(令和4年度)」によると全国の小学校で通級による指導を受けている児童数は平成18(2006)年度から毎年増加しており、令和3(2021)年度は平成18(2006)年度の約3.8倍になっている。東京都教職員研修センター(2024)の『特別支援教室及び通級による指導』指導の充実のためのガイドブック～実態把握に基づく自立活動の指導改善～では、東京都の小学校で特別支援教室の指導を開始した平成28(2016)年度と令和3(2021)年度では利用児童数が約2.5倍になっている。利用児童数の増加に伴い、通級の教員数も増加している。

特別支援教育を担う教員の育成の動向として文部科学省(2022)の「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議報告(令和4年3月)」では、「抜本的に特別支援教育の経験者を増やすためには、原則として全ての教師が比較的若い時期に特別支援教育を担当することが最も有効」として、全ての教師に対し特別支援教育の知見や経験を蓄積するための組織的対応を図っている。このような動向に伴い、通常の学級から初めての異動で特別支援教室に配置される教員が増加することが見込まれるが、通常の学級から初めての異動で特別支援教室の教員に配置される教員が直面する困難がどのようなものであるかは、研究が少なく明らかになっていない。

特別支援教室を担当する教員の困難についての先行研究である齋藤(2021)は半構造化インタビューから7つの大きなカテゴリーを抽出することで、困難を明らかにしている。また、特別支援教室の教員の専門性についての研究のなかで野添・村山(2024)は、「特別支援教室制度に対する理解が教育現場に不足しており、制度への理解の不足が特別支援教室の指導や児童の在籍学級との連携等その他の理解の差に繋がっていると考えられる」と指摘している。特別支援教室教員は、業務を行う上で、通常の学級の教員時にはない、特別支援教室を担当する教員特有の負担があることが考えられる。

異動についての先行研究では、マイナスの影響に言及している研究として、保坂(2010)があり、「異動に伴う環境変化に慣れていくプロセスはストレスそのもの」と述べ、異動に伴うストレス要因が、教員の病気休職の原因の1つであると示唆している。

「初めての異動」のマイナスの影響についての先行研究には、町支(2019)がある。町支(2019)では、質的研究により4つのカテゴリーを生成し、初めての異動かどうかを問わない「一般的な異動後の困難」と「初めての異動後の困難」の相違点を明らかにしている。「初めての異動後」における特有の困難のカテゴリーとして【周囲からの視線に関する難しさ】【信念とのズレに関する難しさ】があったことを明らかにしている。

このような先行研究から町支(2019)の【周囲からの視線に関する難しさ】【信念とのズレに関する難しさ】と齋藤(2021)の大カテゴリー【教員としてのあり方への思い】【決まった型がない】は重なるものであり、本研究の半構造化インタビューの結果にもこれらのカテゴリーの困難が強くみられるのではないかと推察をするが、「初めての異動で通常の学級から特別支援教室の担当になる小学校の教員の困難」について明らかにしたものは見当たらない。

本研究は、半構造化インタビューを通して、初めての異動で通常の学級から特別支援教室の担当になる小学校の教員の困難について異動の内示から2年を中心に困難の出現時期に注目しつつ、包括的、探索的に知見を得ることを目的とする。

2 方法

初めての異動で通常の学級から特別支援教室の教員となった経験をもつ9名の小学校教員に半構造化インタビューを実施した。調査協力者の経歴等は以下の表1に示した。精神疾患により休職している教員の約半数が、所属校に配置後2年未満で休職に至っていることから、異動の内示から2年を中心に時期を区切ってインタビューを行った。具体的には、「内示」では「異動で特別支援教室に決まったときのことを聞かせて下さい」、それ以降は「4、5月」「1学期」「1年」「2年以降」に区切って「困ったことや苦しいと思ったこと。また、その中でやりがいを感じたのはどのようなことですか」と質問を行った。インタビュー内容は逐語化し、佐藤(2008)の質的データ分析法を用い分析を行った。

表1 調査協力者の経歴等

	性別	教員経験年数	特別支援教室の経験年数	現在の担当	初任校の在任年数	初めての異動時の年齢
A教諭	女性	15年	2年	特別支援教室	7年	34歳
B教諭	男性	10年	2年	通常の学級	6年	30歳
C教諭	男性	9年	3年	特別支援教室	4年	30歳
D教諭	男性	13年	7年	自閉症・情緒障害 特別支援学級	5年	31歳
E教諭	女性	15年	3年	通常の学級	7年	32歳
F教諭	男性	16年	6年	通常の学級	6年	29歳
G教諭	女性	10年	4年	特別支援教室	6年	29歳
H教諭	女性	15年	3年	通常の学級	8年	31歳
I教諭	男性	15年	9年	特別支援教室	6年	33歳

3 結果と考察

分析の結果、以下の表2のように、困難について大カテゴリー6個、中カテゴリー16個、小カテゴリー56個を生成した。大カテゴリーは【未経験による困難】【連携の困難】【専門性の低さによる困難】【巡回指導の困難】【教室間の差による困難】【通常学級を基準と考えることによる困難】である。また、小カテゴリーを発話のあった時期で整理した。時期ごとの小カテゴリーの数は「内示」では12、「4、5月」では37、「1学期」では42、「1年」では38、「2年以降」では25であった。

町支(2019)の初めての異動の困難の特徴的カテゴリーに照らすと、生成されたカテゴリーの【通常学級を基準と考えることによる困難】【専門性の低さによる困難】が初めての異動の困難にあたりと推測された。本研究の【通常学級を基準と考えることによる困難】【専門性の低さによる困難】は、町支(2019)の【信念とのズレに関する難しさ】【周囲からの視線に関する難しさ】を可視化したものであると考えられる。通常の学級の担任から初めての異動で特別支援教室の担当となることによって生じた特有の困難にあたりと考えられる。これは、通常の学級の担任として培った基準や意識に基づいて、異動先の特別支援教室の業務を捉えていることに起因すると考えられる。

困難のカテゴリーを時期の面からみると、特定の時期に語られた困難と継続して語られた困難が存在した。【専門性の低さによる困難】は、おおむね特定の時期にみられた。【通常学級を基準と考えることによる困難】には特定の時期にみられる困難と継続してみられる困難があった。【通常学級を基準と考えることによる困難】の中カテゴリーのうち、特定の時期にみられるものは〈想定外のキャリアに対する困惑〉であり、継続する困難として〈通常学級の担任経験との比較によるストレス〉(通常学級が主流という考えによるストレス)があった。

困難の小カテゴリーの数からは多くの種類の困難が存在していた時期と困難の種類が少ない時期があり、「1学期」が最も多く、次いで「1年」、「4、5月」に語られたものが多かった。このことから、異動した1学期には特に様々な種類の困難にさらされていることを示すものであった。また、このような時期ごとの困難の種類が多寡の傾向は、【専門性の低さによる困難】【通常学級を基準と考えることによる困難】でも同様で、異動後の1学期や1年の期間は困難の種類が多い傾向がみられた。

表2 困難のカテゴリー、出現時期、出現数

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	内示	4, 5月	1学期	1年	2年以降も	
【未経験による困難】	〈授業以外の業務が未経験なことによる不安〉	『業務内容が分からないことによる不安』(12)						
		『教室でやっていけるか不安』(2)						
		『教室立ち上げの戸惑い』(8)						
		『仕事の見通しの欠如』(13)						
【連携の困難】	〈学級担任との連携の困難〉	『児童の実態が分からず不安』(2)						
		『指導内容が分からない』(4)						
		『退級基準の難しさ』(9)						
		『在籍学級と児童の姿が異なる』(5)						
【専門性の低さによる困難】	〈校内の職員との連携の困難〉	『指導観や達成の程度への学級担任とのギャップ』(9)						
		『学級担任とのコミュニケーションの困難』(11)						
		『校内の職員との連携の難しさ』(6)						
		『異動での人や場所・雰囲気の違い』(5)						
【専門性の低さによる困難】	〈教室内での考え方の違い〉	『校内の職員とのやり取り』(12)						
		『拠点校のことが分からない』(5)						
		『教室内での児童観・指導観の違い』(5)						
		『教室内のコミュニケーションの困難』(10)						
	〈中長期的な指導の困難〉	『状態の改善への見通しがもてない』(11)						
		『児童を見取れない』(9)						
		『個別指導計画の立案の困難』(8)						
		『個別指導計画の報告の困難』(13)						
	〈他の教員へ寄与できないことでの困難〉	『専門性のないことでの困難』(16)						
		『指導力不足等の課題のある教員による困難』(5)						
		『他の教員の困難を助けられない無力感』(2)						
		『保護者への助言の困難』						
	【巡回指導の困難】	〈巡回指導業務の煩雑さ〉	『保護者に安心してもらえる力の不足』(5)					
			『進路指導の困難』(5)					
			『授業準備ができない』(10)					
		〈巡回指導による所属感のなさ〉	『教材の選定・作成の困難』(3)					
『授業での指導方法が分からない』(9)								
『指導記録作成の困難』(2)								
【教室間の差による困難】	〈教室ごとの違いによる困難〉	『小集団指導の難しさ』(3)						
		『実態から離れた指導での失敗』(10)						
	〈教室の変化による困難〉	『移動が大変』(2)						
		『巡回の事務手続きの煩わしさ』(3)						
【通常学級を基準と考えることによる困難】	〈通常学級の担任経験との比較によるストレス〉	『打ち合わせの時間が無い』(6)						
		『巡回校の授業が少なく所属感がない』(13)						
		『校務分掌の仕事と一緒に出来ない』(7)						
		『巡回校での立場・扱いの違い』(6)						
		『地域による指導方法の違い』(3)						
		『地域による指導方法以外の違い』(2)						
	〈想定外のキャリアに対する困惑〉	『校務分掌で担う範囲が定まらない』(6)						
		『制度や様式の違い』(7)						
		『管理職が変わることでの困難』(5)						
		『児童とのつながりの希薄さ』(7)						
		『やりがいがない』(9)						
		『指導力が付くのに時間がかかる』(5)						
〈通常学級が主流という考えによるストレス〉	『すぐに成果にならない』(6)							
	『承認されにくい』(8)							
	『指導観について学級担任の経験とのギャップ』(14)							
	『学級担任時と同じ児童対応ではうまくいかない』(7)							
	『キャリアへの不安』(9)							
	『学級担任でなかったショック』(11)							
時期ごとの困難の出現数			12	37	42	38	25	

は困難として語られた出現時期を示す

4 今後の展望

本研究の課題として、研究協力者については、通常の学級の担任として勤務後に初めての異動で特別支援教室の担当となったこと以外の条件については加味していない。今後の研究で、初めての異動で通常の学級から特別

支援教室を担当することになった教員の困難についての知見が精緻化され、量的にも積み上げられることによって、困難がさらに明確になることが望まれる。

また、成果として、本研究では、異動の内示を受けた際に、既に困難を感じていることからそのような時期に支援をする必要性もうかがえる。また、調査協力者の語りからは、適切な時期に上司や同僚の理解や受容に基づく関わりにより、初めての異動で通常の学級から特別支援教室の担当となった小学校教員の困難が緩和されることが推察された。

5 参考文献

- 町支大祐. (2019). 中学校教員の異動後の困難に関する研究 初めての異動に着目して. 教師学研究, 22(1), 37-45.
- 保坂亨. (2010). 教員のメンタルヘルス問題を構造的にとらえる (教職員の健康・学校組織の健康). 日本教育経営学会紀要, 52, 129-133.
- 文部科学省. (2013). 教職員のメンタルヘルス対策について (最終まとめ) .
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/088/houkoku/1332639.htm 20241126 最終閲覧)
- 文部科学省. (2022). 特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議報告 (令和4年3月) .
(https://www.mext.go.jp/content/20220331-mxt_tokubetu01-000021707_1.pdf 20241126 最終閲覧)
- 文部科学省. (2024a). 特別支援教育資料(令和4年度) .
(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1406456_00011.htm 20241126 最終閲覧)
- 文部科学省. (2024b). 令和5年度 公立学校教職員の人事行政状況調査.
(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/1411820_00008.htm 20241221 最終閲覧)
- 野添絃花・村山拓. (2024). 特別支援教室の通級指導および巡回指導における担当者の専門性: 児童とのかかわりについての一考察. 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 75, 151-174.
- 齋藤友紀子. (2021). 「通級による指導」を担当する教員の困りと工夫についての研究—半構造化面接を通し—. 創価大学大学院紀要, (42), 239-253.
- 佐藤郁哉. (2008). 質的データ分析法, 新曜社.
- 東京都教職員研修センター. (2024). 「特別支援教室及び通級による指導」指導の充実のためのガイドブック ～実態把握に基づく自立活動の指導改善～.